

「天皇学」は、日本学！ 新たな「天皇学」への入門講座。

## 「天皇学」への展望

——『「天皇学」入門ゼミナール』刊行——

京都産業大学名誉教授

所功

本書の題名には、「天皇学」という過分な用語を掲げました。しかし、その内実は「天皇史」を点描するため主要な情報と図版を盛り込んだ、基礎ゼミナール用の入門書にすぎません。

### 「史は書を絶たず」

ただ、この不十分な「天皇史」でも、何とか書きえたのは、古代以来の関係史料が現存するからです。とりわけ歴代天皇ご自身の筆跡が相当に残っておりまして、しかも、その多くが帝国学士院編の『宸翰英華』（図版篇・解説篇）に集成されて

います。また、編纂された歴史書・資料集も数多くあります。その最も古い現存史書は、周知のとおり和銅五年（七二二）太安万侶の撰上した『古事記』です。この「序」に当書の成立事情を略述する中で「史不<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>書」と記しています。

この四字句は、漢籍に出典があり、読み方も解釈も一様ではありません。ここでは、原意を離れて、私流に「史（史家は書（記録）を絶たず（止めない）と読解し、座右銘の一つにしています。これを敢て敷衍すれば、歴史家の務めは古来の伝承や現在の事象を記録し続けることだ、と

自ら思い定めております。

もちろん、本書は『古事記』などのような不朽の名著に較ぶべくもありません。ただ、歴代の宸翰や先賢の著作などから学びえたことの一端を判り易く紹介することに努めました。それは子供にもできることであり、それが大きな意味をもっていることに気付かせてくださったのは、平成の皇后（現上皇后）陛下です。

### 『子供時代の読書の思ふ出』

二十歳代半ばで皇太子妃となられ、多くの人々から「美智子さま」と呼ばれ親しまれてきた皇后陛下は、平成十年（一九九八）九月、IBBY（国際児童図書協議会）ニューデリー大会用の記念講演（ビデオ放映）で、「子供時代の読書の思い出」と題する名スピーチをされました。この中で、昭和二十年（一九四五）、国民学校

六年生(十歳)として戦時疎開の時に読んだ本の感想を、次のように述べておられます。

父が「持つてきて」くれた神話伝説の本は、私に、個々の家族以外にも、民族の共通の祖先があることを教えたという意味で、私に一つの根つこのようなものを与えてくれました。本というものは、時に子供に安定の根を与え、時にどこにでも飛んでいける翼を与えてくれるもののようにです。

その中で「忘れられない話」としてあ



弟橘比売命(小灘一紀画)

げられましたのは、「倭建御子」が東国への遠征途中、「付き添っていた后の弟橘比売命」が、「海神のいかりを鎮めるので、皇子はその使命を遂行し(景行天皇に)覆奏してほしい、と言い入水」した時の「別れの歌」を引き、当時の感銘を次のように語られています。

弟橘の言動には……「夫建と任務を分かち合うような、どこか意志的なものが感じられ、弟橘の歌は……「いけにえ」という酷い運命を、進んで自らに受け入れながら、恐らくはこれまでの人生で、最も愛と感謝に満たされた瞬間の思い出を歌っていることに、感銘という以上に、強い衝撃を受けました。……愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとして、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います。

このような鋭い受けとめができたのは、格別に豊かな感性をもつ少女美智子さまだからかもしれません。しかし、私どもでも、『古事記』『日本書紀』のような歴史書があるからこそ、建国史上の悲しくも美しい物語を知ることができるのです。

とはいえ、どんな名著であれ、読む機会がなければ知ることも伝えることもできません。この点に関して、美智子さまは講演の中で、父上から差し入れられた本は「今考えると、本当によい贈り物であったと思います。なぜなら、それから間もなく戦争が終わり、米軍の占領下に置かれた日本では、教育の方針が大幅に変わり、その後は歴史教育の中から、神話や伝説は全く削除されてしまったからです」と明確に言及しておられます。

これは重大な指摘です。しかも「戦後教育の中から……削除されてしまった」

のは、「神話や伝説」だけでなく、歴代天皇の主要事績もほとんどタブーになりました。

## 「天皇学」は「日本学」の中核

このような美智子さまの感性と見識は、やがて皇室へ入ってますます品位を磨かれ、見事に花開いています。このような真心と勇氣は、皇室の方々も一般の人々も大事にしたいと思ってきたのではないのでしょうか。

それを上げていえば、天皇に代表される皇室の在り方は、私ども一般国民の日本社会と重なりあっており、学ぶべきことの多い至高のお手本だと思われまます。私はこの観点から敢て「天皇学」は「日本学」だ、という仮説を立て、その検証に取り組めたらと念じています。

かくいう「天皇学」にも「日本学」に

も確実な定義があるわけではありません。ただ、現在の天皇・皇族たちがなさっておられる事、皇居内外に有形・無形の文化としてある物を、可能な限り広く深く知ろうとすれば、そこから日本（国民・社会）の本来的・理想的な在り様を考え学ぶこともできるように思われます。

たとえば、天皇陛下は（皇族も）多様な「お務め」をされています。それらを見聞きする一般の私どもは、日常的に自分のこと目先のことにとらわれがちですが、それだけでなく、すべての縁ある人々と心を通わせ、さまざまな歴史を踏まえて未来を考えながら、誠実に真剣に生きる英知を学び取ることはできるはず。また、皇室に現存する文物にも、今の日本人が忘れていたり疎かにしている大切な知恵が伝わっています。たとえば、宮中祭祀は年々歳々元日から大晦日まで

丹念に行われていますが、その主要な神饌（お供え）のお米には、皇居（吹上御苑）の御田で天皇ご自身が種播きも田植えもされ、身近な皇族と刈取りも足踏み脱穀もされる「手作り」なのです。

（本書あしがきより抜粋）

## 「天皇学」入門ゼミナール

所功

四六変判 四一六頁 一九八〇円

図版多数

### ■好評既刊書

所功 **天皇の歴史と法制を見直す**

歴代天皇と宮廷文化の実像を解き明かし、近現代の皇室法制の成立史と問題点を概述しながら、当面必要な改善案も提示する。 三九六〇円

市村真一 **皇室典範を改正しなければ、**

**宮家が無くなる**

日本国家として重大な礎は、憲法と皇室典範である。〈対談〉所功ほか 三〇八〇円